

追悼 村中義夫先生を偲んで

特別支援教育実践研究センター長 大庭重治

平成24年2月7日、村中義夫先生が享年83歳でご逝去されました。ここに謹んで皆様にお知らせいたします。上越教育大学を御退官になられて18年がたちましたが、突然の訃報に接し、お元気なうちにお会いできなかったことをただただ残念に思います。

村中先生は、昭和26年3月に東京教育大学附属盲学校をご卒業後、東京教育大学教育学部に入学されました。障害のある学生が国立大学に入学した最初のケースだったとのことで、当時大きな話題になったようです。同大学卒業後は、東京都立文京盲学校の教員になられ、16年にわたり視覚障害児の教育に携われました。その間、障害児教育の関係者では初めて東京都の試験に合格され、アメリカに半年間研修に出かけられました。昭和46年に東京都心身障害者福祉センターに移られ、48年には視覚障害科の初代科長に就任されました。それまで教育関係者が東京都のセンターの科長になった例はなく、村中先生が初めてだったようです。

その後、昭和59年4月からは上越教育大学障害児教育講座(現在の大学院特別支援教育コース)において教鞭を執ることとなり、講座の設置当初からその運営にあたられました。昭和62年には教育学博士の学位を取得され、翌63年に障害児教育実践センター(現在の特別支援教育実践研究センター)の初代教授に就任されました。当時助手だった私は、お祝いの席を仲町に準備した記憶があります。大きな広間でにこやかに座っておられた先生のお姿を今でもはっきりと覚えています。その私がかくしくも今年度から特別支援教育実践研究センターのセンター長を拝命しているのは、何かの巡り合わせのようにも思えます。平成4年には、村中先生を中心とするスタッフにより新たに課程認定を受け、盲学校の教員免許状を出すことができるようになりました。この時から私も視覚障害児の心理に関する授業を担当するようになり、村中先生からはいろいろなアドバイスを頂きました。そして、平成5年3月のご定年まで、講座やセンターの運営の中心となり、多くの学生に対して研究指導をされました。その学生たちは、今では大学や特別支援学校などにおいて中心的な役割を果たしています。

このような村中先生の足跡を辿ってみますと、日本における視覚障害者の先頭に立ち、常に社会進出の道を開拓されてこられたという印象があります。現在、多くの視覚障害者が様々な分野で活躍されている状況を見れば、その社会的影響の大きさは誰もが認めるところではないでしょうか。

村中先生とは、個人的には最後の2年間、科学研究費による研究でもご一緒させて頂きました。当時、富山県立盲学校(現在の富山県立富山視覚総合支援学校)の幼稚部にたくさん子どもたちが在籍していたことから、定期的に学校を訪問して、先生方と発達支援に関する共同研究を行いました。この盲学校との共同研究は現在でも続いています。学校訪問の夜には、毎回のように駅裏にあった常宿から駅の構内を通り抜けて居酒屋に向かい、迷惑を顧みず長時間にわたり先生を質問攻めにしていました。定期的にやってくるこの研究談義は、私にとってはこの上なく楽しく、そして非常に貴重な時間となりました。また、村中先生の思い出として忘れられないことに、研究室の暗闇の中に浮かび上がる拡大読書器の前で、黙々と仕事をされているお姿があります。先生の所におじゃました時に、入口でそっと部屋の明かりを点けたことが何度もありました。夏には研究室のドアが開け放たれていましたので、「村中先生を見倣いなさい」という言葉が私たちや院生に対する先輩の先生方の口癖にもなっていました。

他にも先生から学ばせて頂いたことはたくさんありますが、これからも教えて頂いたことを忘れることなく、先生がその基礎を築き上げられた特別支援教育コース、特別支援教育実践研究センターでの教育、研究を大切にしていきたいと思えます。少しでも前進できるように努力させて頂きますので、村中先生、どうぞ天国よりお導きください。先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

平成24年2月29日